

【エッセイ】 焼津市手話サークルさざなみへ入会したのは、小学校6年生のときだった。今から30年前、手話や福祉が一般社会の中であまり知られていない時代だったが、母親と妹の3人で通いはじめたその場所は、温もりに溢れ、子どもだった私を丸ごと包み込み受け入れてくれた。

そして、中学生の頃には、手話の魅力にすっかりはまっていた。手話は耳の不自由な方が使う言葉であるため、日本語同様に方言があり、若い人が使う手話と高齢の方が使う手話とでは違いがあること。手の動きだけでなく、顔の表情や身体を使って表現する大切さなどを学んだ。いろいろなことを学んだが、一番の学びは「相手のことを深く知り、自分の思いも真剣に伝える」ということだ。

高校3年生のときに阪神淡路大震災があり、静岡県ボランティア協会の派遣で現地に赴き、ボランティア活動を行った。今では多くの方が持っているスマホも、当時は携帯電話が出始めたばかりで、メール機能はもちろんのこと、動画やSNSなどのツールもない時代だった。耳の不自由な方との連絡で使っていたFAXは、電話回線が寸断されて使えなくなっていたため、一軒一軒ご自宅へ行き、安否確認と必要な物資の提供を行った。

とくに印象に残っているのは、耳の不自由な一人暮らしの女性宅への訪問だ。思うように手話での会話が通じなかったが、身振り手振りや筆談で、ようやくお互いの気持ちが通じ合ったときは、手を握り合いながら、お互いに涙が流れていた。

「福祉についてもっと学びたい」との思いから、福祉大学へ進学し、多角的な視点で福祉を捉え、理論と実践のバランスの必要性を身につけることができた。

学生時代は児童福祉を学び、障がい者施設での勤務を経て、現在はケアマネジャーとして高齢者が住み慣れた自宅で安心して生活ができるよう支援を行っている。

福祉は決して特別なものではない。福祉の仕事をしている私自身、家族や友人、そして多くの人に支えられて生きている。

何気ない日々の暮らしに感謝しながら、これからも自分のできる範囲で、身近にいる誰かを支えられる人間になりたいと思う。子どもの頃に、私を包み込んでくれた優しさを、これからは地域の中で私が手をひろげて包んでいきたい。